ISSN 2435-3523

# ダイ・コー

大黒屋光太夫記念館だより
30号

2022年3月

## みなもと太郎先生、ありがとうございました。

漫画家・みなもと太郎先生が、令和3年8月7日、心不全のため74歳でお亡くなりになりました。

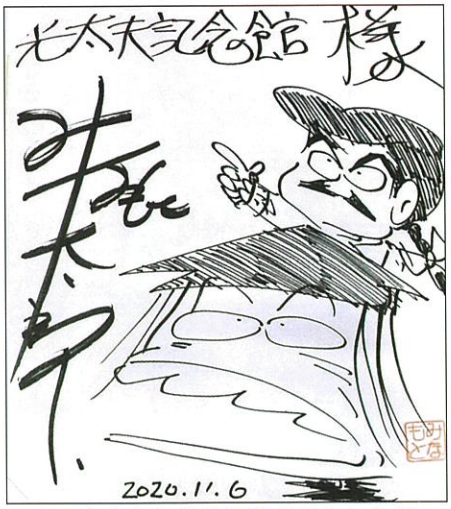
令和2年度の特別展「大黒屋光太夫と『風雲児たち』」（9月30日～11月23日）では、コロナ禍にも関わらず、みなもと先生の原画を見るために日本中から多くの方がご来館くださいました。年齢層も小学生からご高齢の方までと異例の幅広さで、『風雲児たち』の根強い人気を改めて感じました。展示ケースにギリギリまで顔を近づけて原画に見入る方や、展示室の床に座り込んで図録を読む子どもたちの姿が強く印象に残っています。

みなもと先生は、時代を切り拓いた風雲児のひとりとして大黒屋光太夫を取り上げ、漫画の中で大活躍させてくださいました。そして、多くの光太夫ファンを生み出してくださいました。残念ながら未完の大作になってしまいましたが、『風雲児たち』は、これからも新しい読者を獲得しながら読み継がれていくことでしょう。

みなもと太郎先生、光太夫の魅力を多くの人に伝えてくださり、本当にありがとうございました。

※特別展終了後、「大黒屋光太夫と『風雲児たち』」の図録を教材用に配布して欲しいとの希望が複数寄せられました。記念館では、残部が少ないためお応えできませんでしたが、大黒屋光太夫顕彰会がその声を受け、顕彰会発足30周年記念事業の一環として、再版していただけることになりました。小中学生にも読みやすいようにふりがなを追加して1,000部再版し、市内小中学校等に配布していただけるそうです。

▲令和2年度特別展
「大黒屋光太夫と『風雲児たち』」の会場風景




▲みなもと先生から寄せられた色紙

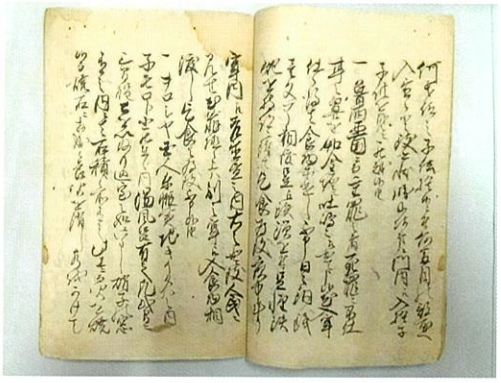
（右のQRコードからみなもと先生が
色紙を描かれている様子をご覧いただけます）▶

大黒屋光太夫記念館
〒510-0224 三重県鈴鹿市若松中一丁目1-8
Tel&Fax 059-385-3797

開館時間/10:00-16:00
休館日/月・火・第3水曜日・年末年始
入館料/無料

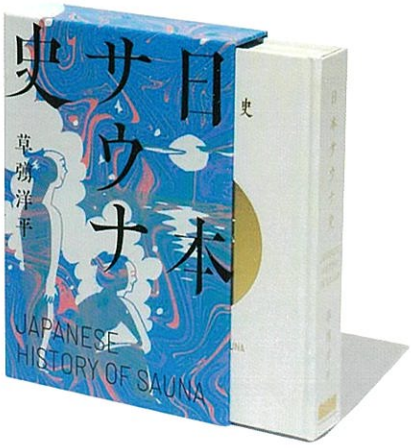
## 光太夫はじめて物語①光太夫とサウナ

サウナ研究家の草彌洋平さんが『日本サウナ史』という本を刊行されました。当館も「光太夫とサウナ」について情報提供をしました。光太夫がサウナとどのような関りがあったのか･･･詳しくは、本書を読んでいただきたいと思いますが、簡単にご紹介します。



▲神昌丸漂流記

光太夫たちがロシアから蝦夷地ネモロ（根室）に帰国したのは寛政4年（1792）の秋でした。光太夫とロシア人一行は根室の海岸に仮小屋を建て、越冬しました。その仮小屋がどんな建物だったのか、いくつかの資料や図が残っています。当館所蔵の「神昌丸漂流記」の中には、「ヲロシア人東蝦夷キイタフ内ネモロに罷在り候内、湯風呂これあり。凡そ二間に三間程に土をもって塗り込め、室の如く仕り、硝子の窓これあり。内には石を積み候処これあり。此の上にて火を焚き候て焼石に相成り候節、火を消し候て水を懸け候へば夫にて沐浴仕り候。日本のから風呂致し候同様にて有之候。」という記述があります。また、国立公文書館にある『戊辰鎖夏記』にはロシア人小屋の図があり、その説明に「山を掘り家を造り込み屋の上に烟りぬきを作り内にて火をたき鳥の羽を焼と云、其烟りさかんなる時に烟り出しの蓋をすると也。室内暖にして衣服を脱て仕事をすると云。窓は皆硝子にてはるよし」と書かれています。




▲日本サウナ史

当館では、この仮小屋のジオラマ模型を作成する際に、資料調査を行い、これが「サウナ」の記述であることに気づきました。根室には、ロシア人によって仮小屋が2棟建てられましたが、その内1棟は西洋式のサウナだったようです。光太夫の帰国によって、根室の海岸に日本で初めてのサウナが作られたのです。（展示内容によりジオラマは展示していないことがあります）

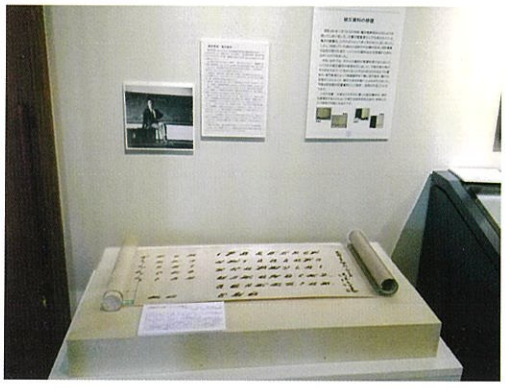
## 亀井高孝旧蔵資料　大黒屋光太夫書「いろは」を修復しました

亀井高孝の御令孫・太田光子様から寄贈を受けた大黒屋光太夫書「いろは」を修復しました。この資料は、亀井邸が火災に遭ったときに被災し、水を被った跡や焼け穴が目立つ状態でした。今回の修復では、破損の大きかった表装を解体し、裏打ちをし直して、新しい表装に仕立て直しました。桐箱と保存容器も新調しました。こうした修復によって、貴重な資料をより良い状態で未来へ繋ぐことができるようになります。

亀井高孝

この資料は、光太夫69歳のときの墨書です。右半分に【いろは48文字】を、左半分には【いろは48文字】と1から15までの洋数字を記し、その下に「ダイ・コー」と署名しています。右端の日本語による署名は「己卯春勢州白子産　大黒光太夫書　六十九翁」です。亀井高孝がこの墨書を入手した経緯は不明ですが、『北槎聞略』（昭和12年　三秀舎）にすでに図版が掲載されているので、早い段階で手に入れたものであることがわかります。

光太夫研究家として大きな業績を残した亀井高孝。彼が手元に置いていた光太夫直筆の墨書は、ご子孫のご厚意で記念館に寄贈され、皆様にご覧いただけるようになりました。亀井高孝の功績と共に、その旧蔵資料も大切に伝えていきたいと思っています。現在展示中ですので是非ご覧ください。



▲展示の様子

## 光太夫はじめて物語② 光太夫とピアノ

2021年10月10日㈰放送のクラシック音楽館「日本のピアノ」（Eテレ21:00-23:00）で、大黒屋光太夫が日本に初めてピアノの情報を伝えた人物として紹介されました。

光太夫が日本に初めて伝えたモノや情報は沢山ありますが、「ピアノ」もそのひとつだったのです。光太夫が語ったピアノについては、様々な文献に散見されますが、ここではかなり詳しく述べられている「北槎異聞」（篠本廉編）の次の記述を紹介したいと思います。

「楽器多キ中ニ五十弦ノ琴アリ。其ノ製造甚ダ奇ナリ。妙音亦（また）言フベカラズ。楽器ヲイギライト云フ。楽ヲ奏スルハ多クハ女ナリ。其ノ奏スルニ両手ニテコノ琴ヲ鼓シ、右足ニテ鼓弓ヲ鳴ラシ左足ニテ笙ヲ鳴ラス。皆機発アリテ、手脚一動スレバ毎器各々鳴り、衆音偕ニ響ク。其ノ節族相応ジテ巧妙ナルコトタトヘカタシ。彼ノ五十弦ノ琴ハ鼓スルニ前ノ方ニ五十ノ細キ木アリ。コノ細木ヲ指ニテオサユレバ機発アリテ糸鳴ル。指ニテ鼓ニハアラズ。此ノ器ノサマ、目ニ観ルバカリニテモ人心ヲヨロコバシム。其ノ帰装ノトキ、此ノ琴ヲ携ヘタク思ヒテ望ミ申シタリ。キリロガ申セシハ、此ノ器ハ二百金ノ価アリ。今度ノ送リ船ニ凡ソ千二百金バカリノ物ヲ買ヒテ載セユクコトナリ。然レバ其ノ価ハ惜シムベキニ非ズ。サレドモ、道路悠遠ニテ路上破壊ノ患ヒ無カランコト難シ。携ヘテモ益ナシトテウケガハザリキ。」

光太夫はピアノをとても気に入って、日本に持ち帰ろうとしましたが、輸送中に破損してしまう可能性が高く、ラクスマンに説得されて諦めたそうです。もし破損せずに輸送することができていたら、ピアノは江戸時代の日本で多くの人を虜にしたかもしれません。私たちも光太夫を魅了したピアノの音（現代のピアノとは少し違うそうです）を聴いてみたいですね。

このような光太夫にまつわる「はじめて物語」は、実は他にも沢山あります。光太夫が持ち帰った【お土産】には、モノだけでなく、こういった情報も含まれるのです。

取材風景▶

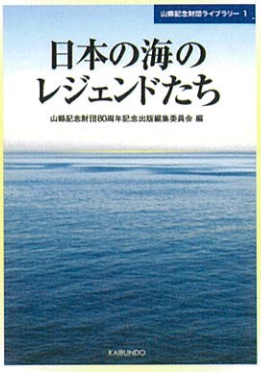
## 『日本の海のレジェンドたち』が住田海事奨励賞を受賞

大黒屋光太夫も紹介されている『日本の海のレジェンドたち』が第53回住田海事奨励賞を受賞しました。

本書は、日本の江戸時代から昭和に至る海運・造船・海上保険など海事産業に大きな足跡を残した23人余の評伝集で、山縣記念財団の80周年を記念して出版されました。大黒屋光太夫の紹介ページは、文化財課職員が担当しました。登場人物は、大黒屋光太夫以外にも勝海舟、坂本龍馬をはじめ、江戸時代から現代にいたるまで多彩に取り上げられています。

日本の海のレジェンドたちをほぼ網羅しつつ、誰にでも読みやすい本にして社会に発信する、という海事広報的な企画の素晴らしさが評価されました。

Amazonやセブンネットショッピングからご購入できます。鈴鹿市立図書館でも貸出可能です。是非お読みください。




山縣記念財団80周年記念
出版編集委員会 編
『日本の海のレジェンドたち』
定価：2,750円（税込）
発行：海文堂出版株式会社

## 開国曙光の碑と顕彰活動

▲初代開国曙光碑（伊坂一郎氏寄贈写真）

大黒屋光太夫顕彰会は、昨年、発足30周年を迎えられました。

では、光太夫の顕彰活動はいつ頃始まったのでしょうか？

江戸時代には、光太夫ら一行の供養碑は、ちょっとした名所になっていたようです。しかし、その事績は時と共に忘れられ、再び光太夫が脚光を浴びるのは明治中期まで待たねばなりませんでした。なかでも文学博士・新村出（「広辞苑」の編者）が、『三重　教育』（明治43年8月号）に「伊勢漂民光太夫等の事蹟」を発表し、同年に県立女子師範学校で「海国史上の伊勢」と題して講演を行った影響は大きかったようです。そして、大正7年（1918）7月、「開国曙光の碑」が若松尋常小学校前の空き地に建碑されました。光太夫の功績を顕彰する目的で地元の人々の手によって建てられた碑であることを踏まえると、この建碑が地域での顕彰活動の機運の高まりを示しているように思えます。発起人となったのは、当時の若松尋常小学校長・伊藤六三郎や若松村長・内山治右衛門、三重県会副議長で地元の名士だった伊坂秀五郎などで、寄附を募って建設費を賄いました。題字は徳川家達（15代徳川慶喜の後、徳川宗家を相続・公爵）、撰文は先述の新村出でした。

この碑は、昭和9年の室戸台風により倒壊し、現在は記念館前に上部のみが残されています。また、「開国曙光の碑」はその後千代崎海岸に再建されましたが、伊勢湾台風によってふたたび破損、昭和51年に大黒屋光太夫顕彰会によって若松地区市民センター駐車場に3代目が建てられ現在に至ります。

## おしえて！こうだゆうくん 第2回

―― 三人のラクスマン?? ――

※2019年「光太夫とふたりのラクスマン」の図録をご参照ください

### 記念館からお知らせ

令和3年度には、開館後16年を経て老朽化していたエアコンや換気設備を更新し、館内照明をLED化してトイレに人感センサーを導入しました。より安心して展示をご覧いただけるようになりました。ご来館の際には、手指消毒や検温など感染対策にご協力いただきますようお願いいたします。

発　行　鈴鹿市神戸一丁目18番18号 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課
TEL 059-382-9031　FAX 059-382-9071
発行日　2022年3月15日